

民衆の星のことは、歌

北尾 浩一

〈星の伝承研究室 〒659-0051 兵庫県芦屋市呉川町9-16〉

e-mail: kitao@ba.mbn.or.jp

天文学史のなかに各々の時代で最高の設備を用いて研究した人、時代の権力者の側から星を観察した人の名前は登場する。しかし、星を生活環境として生き、多様な星の文化を育んだ何十億、何百億の民衆のことをともすると忘れがちではなかっただろうか。本稿では、日本の民衆の星の文化一星の和名・伝承を記録したい。

1. はじめに

一星の和名・伝承の調査史

野尻抱影氏は、主に昭和の前半に全国各地の協力者からの手紙によって和名・伝承を収集した¹⁾。一方、内田武志氏は、1930年から紙面調査を開始した。最初は静岡県を対象とされていたが調査の範囲を全国にひろげていった²⁾。また、増田正之氏は、1941年より富山県を対象に調査を行なった³⁾。石橋正氏は、1948年より日本全国の漁港を対象に調査に取り組んでいる⁴⁾。桑原昭二氏は、1956年より姫路市立姫路高等学校天文気象班の生徒を指導して組織的な調査を行なった。調査に加わった生徒は数百名にのぼる⁵⁾。さらには、1970年には千田守康氏、1974年には三上晃朗氏、1978年には横山好廣氏、そして筆者が調査を開始した⁶⁾。

1980年頃にあと10年ぐらいで星の和名・伝承は失われてしまうと考えたことがあったものの、伝承の力は予想以上に大きく、21世紀を目の前にした今も調査者の努力は続いている。本稿では、筆者の調査記録をもとに星と人とのかかわりについて考えていきたい。

2. 今も記録できる星の和名・伝承

— 1999年の調査から —

1999年4月、広島県尾道市正徳町吉和で宮本虎松さん（大正13年生まれ）から舵星について聞くことができた⁷⁾。

「あれが、この人で、昔の人は船の舵（カジ）とるでしょ。あれじゃ言いよったんじゃ。あれにたとえて、舵みたいにこういうふうになっとるけん。カシラ（頭）が細うてあとの方が広うて、テンテンとこうあるけん、舵星じゃいうて言いよったんじゃ。この人は」

北斗七星を船の舵の形に見たのである。

宮本さんは、星のことを学校で習ったことはなかった。子どもの頃から大人どうしが話をしてるのを聞いているうちに、少しずつ覚えていったのだった。わからないときは、「舵星いうたらどこですか」と父親に尋ねた。

14・5歳の頃の星空を思い出しながら、「そりゃきれいなもんじゃった。夜になったら、星がねキラキラキラ。もうすごい天候がよかったらね星がべったり見えてきれいなもんじゃった。今、それがあんな星いうたってうすく見えるだけ。そりゃ私らに言わしたら、空気がすごい汚れとる」と語る宮本さん。黒板も教科書もなかったが、ほんものの星と海があった。そして、「そりゃきれいなもんじゃ



写真1 星見石（沖縄県八重山郡竹富町竹富島）。人びとは、星により生業に関係する季節を正確に知るために様々な工夫をした。竹富島の星見石もそのひとつで、日没後、薄明の終わり頃に穴から群れ星（プレアデス星団）が見えた時季—立冬の頃、播種を行なった。

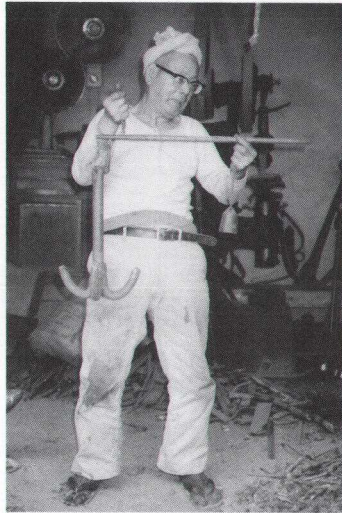


写真2 漁具スマルを製作してくれた登長次郎さん（兵庫県津名郡北淡町富島）。プレアデス星団の和名は、「すばる望遠鏡」という名前にもなっているように「スバル」が有名である。しかし、実際には、スマルという和名も広範囲に分布しており、スマルという漁具に形が似ているからスマルと呼んだという伝承も伝えられている。この漁具スマルを昔ながらの方法で、登さん（大正3年生まれ）は作ってくださった。

った」という感動があったのである。

同じく4月に出会った広島県豊田郡瀬戸田町福田の辻才吉さん（大正3年生まれ）は、皓々と輝く星の明かりについて、「明るいです。そりゃね、船のなかをさっさ、さっさと歩いていくだけの明かりはある」と語ってくださった。星は、時間や方角を教えてくれるとともに、その輝きそのものがたよりになった。それだけに、星の見えない夜は不安は大きかった⁸⁾。

11月に会った北海道亀田郡般法華村元村の杉林福次郎さん（大正7年生まれ）は、ウヅラボシ（六連星 [ムツラボシ] が変化した和名、プレアデス星団）、赤星（おうし座アルデバラン）、三つ星（オリオン座三つ星）、青星（おおいぬ座シリウス）という和名を伝えていた。赤星については、「色はなんぼか赤味がついてるのだね」と、青星については、「なんぼか光があって、青味がかってる」と説明を加えてくださった。杉林さんによると、これらの星が海面から現れるときイカが釣れたのである。

21世紀を目の前に、1999年まで伝わり語られた星の和名・伝承を単に昔のなつかしいこと、ふるさと感じさせてくれるものとして捉える段階にとどまるのではなく、21世紀、星と人とのかかわりを考えるにあたって多くのことを示唆してくれるものとして捉えていきたい。

3. 生活環境としての星

人びとにとって、星は、山や海と同様、日常的な景観であり、生活及び生業と密着した自然環境のひとつであった⁹⁾。

1984年3月に会った愛媛県南宇和郡西海町内泊の鈴木泰助さん（明治39年生まれ）は、「スマルがどこその森の上にいるから何時、スマルの高さあれだから程のよいぞ、網をもとうよと言った。スマルがどこにすわった時刻に突風起きた、と言った」と語った。星空と森の木々は、鈴木さんにとって日常的な景観であった。そして、スマル（プレアデス星団）がどこその森の上にごれくらの高さに見

えているかを観察して時間を判断した。

また、星という自然環境が持つ1年単位の周期性によって、生活及び生業の時季を判断することができた。鈴木さんも、スマルによって農耕の季節を知った。

「スマルあそこに出たからカボチャ植えな…。スマルが朝方あの位置いるから麦熟れる」

1984年9月に出会った福井県小浜市小松東川東の松見鐵次郎さん（明治28年生まれ）は、「秋になってね、タナバタの入りに景色が変わるてな。スバリの入りに霜がおりるとかね。カラツキの入りに雪がふるとかね」と語った。夜明け頃にタナバタ（織女と牽牛）が入る時季に天候が悪くなり、スバリ（プレアデス星団）の入る旧の10月頃に霜がおり、カラツキ（オリオン座三つ星）の入る旧の11月頃に雪が降る—というように、星、霜、雪が共に繰り広げる自然環境に気づきながら暮らしてきたのである。

星という自然環境の1年単位の周期性は、日和が悪くなる時季の判断をも可能にした。

1982年8月に出会った鹿児島県熊毛郡屋久町栗生の山崎東（アズマ）さん（明治41年生まれ）は、「スマルはちょうどな、11月の下旬頃な、沈むんですよ。海の中に入ってな。そういうときには、ちょうど11月の下旬頃にな、ニシカゼ、アラカゼが吹くんですよ。明け方に沈むのがいちばんアラカゼ吹くんですよ」と語った。スマルのイイゲシと言って、スマル（プレアデス星団）が夜明けに沈む11月下旬頃、風速30mくらいの突風が吹いたのである。

1984年11月に出会った鳥取県気高郡青谷町夏泊の津野島善吉さん（明治31年生まれ）も、スマルが夜明けに沈む時季を目安にしていた。

「来月なると、スマルが海に入るようになる。宵にあがったスマルが夜明けに入るようになる。そうすると、どういふことか、スマルの入りに天



写真3 畑に七夕の竹を立てる（群馬県佐波郡赤堀町）。ひとりひとりの主体的な星とのかかわりが多様な星に関する伝承を育んだ。七夕についても、ひとりひとりの願い、祈りが七夕の竹を川に流さずに畑に立てると虫がつかないという伝承を育んだ。

候が変わってくるわな。その頃になると何ともないこともあるんだけど、明け方にしけてくる。スマルの入りに模様がかわってくるのがようあるな」

4. 人びとの行動力を支えた北極星

民衆の行動力というのは、ものすごく大きいものである。1984年2月に出会った愛媛県越智郡魚島村魚島の米原賢一さん（明治32年生まれ）は、小さな船で櫓を押しながら玄界灘をこえていった。その行動力を支えたもののひとつは、船を進める方向を教えてくれる北の子の星（北極星）だった。

「沖を走るおりには、北の子の星（キタノネノホシ）を目標にして走りよった。三つ星、スマルボシより北の子の星は、もう日和やったら目を離さない」

魚島から朝鮮半島まで玄界灘をこえて櫓を漕いで行く際、北の子の星から絶対目を離したらいけなかった。

一方、1987年4月に出会った岡山県倉敷市下津井の下方順治さん（大正7年生まれ）は、「わしらのおやじから聞いた話では、玄界灘の方へ行ったら星のことを言いよったそうです。言いよったいうんがふつうの星じゃなしに子星（ネノホシ）

いうてな、あれのことは言いよったです」と語った。下方さん自身は玄界灘を櫓を押して行った経験はなかったものの父親から子の星（北極星）の重要性を教えられたのだった。

5. 星の歌の創造

人びとは、星を生活に役立てるとともに、星の歌を創造し伝えた。

1984年2月に出会った愛媛県越智郡魚島村魚島の藤本藤枝さん（明治39年生まれ）は、櫓を漕ぐときの歌を伝えていた。

「天がせまいかよー、スマルボシはなーぶよ、海がせまいか、エビかごむーよー」

空は広いのに無理にスマルボシ（プレアデス星団）はひとところにごじゃごじゃとたたまってならばなくてもよいのに、海は広いのに海老は体を小さく曲げなくてもよいのに—という意味である¹⁰⁾。

人びとは、広大な星空と海との間で、ひとつひとつの星と海の生き物に接してきた。そして、自分の目で観察して感じた疑問—広大な星空にスマルボシはひとところにならばずに均等に分布すればよいのに—ということ、広大な海に小さく体を曲げている海老とともに歌ったのである。

1984年8月に出会った兵庫県揖保郡御津町室津の瀬越甚太郎さん（明治28年生まれ）は、「子の星は夜に3寸、東に行くようなかげんのあることは言いよりましたね」と語った。そして、「やーれ、月もスマルもみな西西とよー。やがて東がのおー、やーれ寂しかろよー」と歌った。月もスマル（プレアデス星団）も西の空へ動いていって東の空が寂しいので、子の星（北極星）が東へと動く—という意味である。



6. 星物語の創造

人びとは、星を歌うとともに物語を創造した。特に、北極星が動くという物語は、地域によって多様な物語が創造され分布している¹¹⁾。

1984年4月に出会った兵庫県津名郡北淡町富島の熊野磯吉さん（明治30年生まれ）は、動きの発見者を「トクゾウの妻」と伝えていた。

「子の星は、ひと晩に屋根の瓦1枚だけ動くんだ。瓦1枚だけ。まあ動かんにしとんや、トクゾウの嫁はんが、トクゾウが船乗りよんにな、暗いときは、方角がわからないと思った。嫁はんは、機織り織り、じっと北の子の星をねらった。そしたら瓦1枚分動いた」¹²⁾

また、1984年7月に出会った兵庫県飾磨郡家島町坊勢島の前田富蔵さん（明治35年生まれ）は、動きの発見者は「クワノトオクロウの妻」と伝えていた。

「クワノトオクロウいうて船乗りで偉い人がいた。

して、三寸動くいうことを…」

楽譜 愛媛県魚島の星の歌

採譜者 北尾正子

てんがせまいかよ
すまるほしゃな-らぶよ
うみがせまいかえびかごむ
よ

クワノトオクロウは、子の星を見て、北、南、東、西…と船を操った。クワノトオクロウの嫁さんが偉かった。クワノトオクロウは子の星は動かん言うてた。ところが、クワノトオクロウの嫁さんが、夜に機織りよって、子の星が動くのを発見した。おとうさん、子の星が基準と言いますが、子の星は障子の軸1本動きます。嫁さんは、トオクロウにこう教えた」

一方、1987年1月に会った兵庫県相生市の橋本鉄雄さん（明治42年生まれ）の場合は、発見者が天竺徳兵衛の妻であった。

「それも、うそかほんまか知らんで。昔、天竺徳兵衛いう高田屋嘉兵衛みたいな偉い船乗りがおったんじゃ。船乗りは、たいがい夜走りした。そうしたところが、またその嫁はんが偉かったんじゃ。婿はんが夜さり夜走りしよるから自分も夜さり機織る。それで、おやじさんと問答する。動かん星が子の星さんだいうし、そしたら嫁はんの方が偉かったんや。子の星さんを障子の棧とあわしたんや。そ

仮に物語が創造されたのが1600年頃だと仮定すると、北極星（こぐま座 α 星）は天の北極から約2.9度離れている。これは、現在の約3倍、月が約6個並ぶくらいで、物語のように、揺れている船の上では無理でも、障子や瓦等を目印にする と北極星の動きが発見できる可能性のある大きさである。

7. カノープスを観察した人びと

水平線というのは、人びとにとってたいせつなものであった。星空と海が分かれるところ、それが水平線であった。その水平線から、星空をバックにして、島々が、対岸の山々がシルエットとなり、人びとの心をとらえる。そして、水平線から、島々、対岸の山々から少しのぼってすぐ沈むりゅうこつ座のカノープスを見事とらえて地域に根ざした名前を育んできた。

1985年5月に会った茨城県北茨城市大津町の山形兼吉さん（明治29年生まれ）は、大気差を考慮してもわずか南中高度0.9度のカノープスを観察した。山形さんは、カノープスをメラボシと呼び、その星が見える理由について、「メラボシちゅうのがあがるというと、南の風が強いんだね。南の風が強くて、向こうが空気がすいちまうわけだね。くもってる空気を吹きとばすので、この星が見えるわけだから」と語った¹³⁾。北茨城市は、カノープスの和名・伝承の北限である。

1984年3月に会った兵庫県加古郡播磨町古宮の筒井栄次さん（明治43年生まれ）は、「みかんがようけ、淡路みかんがでますやろがいな。そのときにみかん星いうてこっちにあがりまんね。昔、樽で商売しよるときは、みかん星めあてやったんや。星ばかり見て商売しよったんや」と語った。古宮の南に相当する淡路島の産物「みかん」が名前に反映されたのである。

1984年10月に会った兵庫県神戸市深江の岩



井種吉さん(明治39年生まれ)は、「紀州の方、和歌山の方、まあ大きい星出まんのや。紀州のみかん星言う」と語ってくださったが、この場合は淡路でなく紀州の「みかん」であった。

1988年11月に会った広島県福山市鞆町の山下岩吉さん(明治33年生まれ)は、「伊予の横着星、四国のな、沖にな、夜明けにちょっと出るんですよ。そのしこなし(ふるまい)が横着星。ここのものがつくとるのです」と語った。ほかの多くの星とちがって南の方にちょっと出て見えなくなるというカノープスの動きの観察のあとが横着星という星の名前に反映されていたのである。

その他、1984年3月に会った兵庫県明石市東二見の城尾栄治さん(明治33年生まれ)の場合は淡路星、同年8月に会った兵庫県揖保郡御津町室津の松岡松蔵さん(明治29年生まれ)の場合は家島星と、それぞれカノープスの見える方向の地名が名前に反映されていた。

8. おわりに

— 21世紀の星の文化の創造

本稿では、天文学史に天文学者の名前が登場するように、星の和名・伝承を伝えてきたひとりひとりの名前を記録した。ただ、紙面の関係でほんの一部の人の名前しか記録できていないことをお詫びしなければならない。

「教科書は買ってもらったが学校へは行けなかった」

「学校さ行きたくねば行かなくてもよし、行ってよし」

「学校がきらいでね、私は10歳から船行っちゃったんです」

このように語った人びとのことを思い出す。もし、学校で天文を習っていれば、天文学者になれたかもしれない。しかし、星とのかかわりの大きさは、

星を生活環境としてきた民衆も天文学者も同じではなかろうか。そして、天文学者の創造する論文も、民衆の星のことは、歌もどちらも宇宙に対する人間の最高の営みではなかろうか。

すべての人の生活環境に星を取り戻し、かつて民衆が星のことは、歌を育んだように、ひとりひとりの星の文化を創造することができれば、そして、宇宙から地球を世界を見つめなおすことのできる21世紀を切り開くことができれば—と願う。

参考文献

- 1) 野尻抱影, 1973, 日本の星(中央公論社)
- 2) 内田武志, 1973, 星の方言と民俗(岩崎美術社)
- 3) 増田正之, 1990, ふるさとの星—越中の星ものがたり—
- 4) 石橋 正, 1989, 乾杯! 海の男たち(成山堂書店)
- 5) 桑原昭二, 1963, 星の和名伝説集—瀬戸内はりまの星—(六月社)
- 6) 北尾浩一, 1994, 「天文民俗学」, 続日本アマチュア天文史, 続日本アマチュア天文史編集会編(恒星社厚生閣), 330
- 7) 北尾浩一, 1999, 「天文民俗学試論(18)」, 天界, 80(892), 580
- 8) 北尾浩一, 1999, 「天文民俗学試論(20)」, 天界, 80(894), 730
- 9) 北尾浩一, 1999, 「星の環境民俗学試論」, 日本民俗学, 219, 125
- 10) 北尾浩一, 1997, 「星に学ぶ漁民のくらし」, 現代を生きる学び, 福尾武彦編(民衆社), 288
- 11) 北尾浩一, 2000, 「試論—星物語の多様性—北極星の物語を事例として—」, 天界, 81(896), 11
- 12) 北尾浩一, 1991, ふるさと星物語(神戸新聞総合出版センター), 10
- 13) 北尾浩一, 1987, 「星の旅 北茨城大津港」, 星の手帖(河出書房新社), 35, 86

Tales and Songs of Star created by People

Kouichi KITAO

Institute for Star Folklores

Abstract: People learned by stars not only for their lives but also the creation of their culture. For instance, they created tales regarding the movement of the polar star. Also, they created folk songs. So, they were creators of their culture.